

<前回：ジェンダーから見た旧約聖書>

(1) キリスト教におけるジェンダーの問題

1. 宗教における「女性」の二面的位置

新宗教における、あるいは伝統宗教における女性。

2. 制度レベルとイデオロギーレベルにおける男性中心性

3. キリスト教とフェミニスト神学

イエスの宗教運動の理念と制度化されたキリスト教会の現実。

4. 人間解放という視点：抑圧構造の再生産を越えて、いかにイメージするのか。

↓

源泉に遡って考える。

問題：神の国における男女の平等性と教会の階層性。

(2) 旧約聖書とフェミニスト的聖書解釈

5. 旧約聖書における男性中心主義、家父長制に対して。

6. フィリス・トリブル『フェミニスト視点による聖書読解入門』新教出版社。

・抑圧された女性の記録を取り戻す試み。ミリアムの場合。

7. 「モーセ誕生以前にすら、エジプトのファラオに抵抗する女性たちに焦点をあてた物語」「これらの女性たちは、男性たちの指図も助けも得ずに自分たちで行動していきます。

「二人の助産婦」

「ヘブライ人の女性が生まれたばかりの彼女の赤ん坊をバスケットに入れて、河岸の葦の中に置いた」「この赤ん坊の名前の知れない姉」(9)

「この物語の中心にいるのは、無名の姉です。」「物語が続き、出エジプトの事件が進むにつれて、主役を果たしていた彼女やその他の女性たちは姿を消します。モーセやイスラエルの他の男性たちが目立つようになるにつれて、彼女たちは物語から消えていくのです。」(10)

「物語が海に達すると、主役はモーセです。・・・、モーセとイスラエルの男性たちの口に荘厳な歌が上がります。」(11)

「ミリアムのこれらの言葉は、モーセに帰せられている賛美の歌の第一連と合致しています。・・・ミリアムと女性たちのこの小さな物語が保存されていることの意味は何か、「一見したところミリアムは、モーセに帰せられている長い詩の第一連を繰り返したかのように読めます。しかし、そうでないかもしれません。一九五〇年代に二人の聖書学者がこの問題について論文を書いています・彼らの議論によれば、・・・歌全体がミリアムとイスラエルの女性たちのものであって、モーセと男性たちのものではなかったということです。」(12)

「男性の聖書編集者たちが、モーセの権威を高めようとする熱心のあまり、・・・彼らはミリアムを完全に排除することができなかった。なぜなら、彼女の物語は人々の記憶に深く留められていたのですから。」

「フェミニスト解釈はこの長い歌をミリアムのものとして取り戻します。」(13)

「彼女は強い指導者であったが、ゆえにその代価を払う羽目になっています。男性の中には、女性たちがリードすることを欲せず、自らの見解を支持するために神すらも引き合いに出す人々がいます。」(14)

「アロンは兄弟の前で姉妹を支持します。けれども・・・彼女はふたたび語ることはないし、荒野の物語で主要な役割を担うこともありません。」(15)

「民衆の支持」「民は、ミリアムが彼らの元に戻るまで出発しようとしなかった。・・・神は民に移動するようにと語り、モーセも彼らに移動するようにと告げました。しかし、民はミリアムに戻るまで動こうとしませんでした。」(16)

「二つの文章の間になんのつながりも作ってはならないと示唆しているかのようです。しかし、この二つをつなげてみると、大事なことをわたしたちは学ぶのです。・・・自然が

ミリアムの死に反応しているのです。反応はただちに起こり、しかも深刻です。自然が喪に服しているのです。砂漠の泉が干上がりました。ナイル河岸で弟の守り手であり、海の勝利におけるリーダーであったミリアムは、いのちのシンボルでした。したがって、いのちの水が彼女の死に弔意を表すのは、なんとふさわしいことでしょう。イスラエルの民と同様、自然も彼女に弔意を表したことになります。」(18)

(3) 神の国の平等主義と制度化

8. 創世記の原初史物語における男女 (アダムとエバ)
手段としてではなく、パートナー (助ける者) として
文明と男女関係の歪み (支配-被支配の構造)
9. P・トリブル「イヴとアダム——創世記二-三章再読」(キャロル・クライスト、
ジュディス・プラスカウ『女性解放とキリスト教』新教出版社)
10. イエスと女性：徹底的な平等主義、女性の弟子を伴った宗教活動 (旅)
↓ スキャンダル
最初期の教会共同体における女性の指導的な役割
11. 「家の教会」から制度化された教会へ (急速に)。家父長的社会の中の教会。
制度化は安定した宗教としての持続性には不可欠であるが、本来の宗教的な理念としばしば緊張関係にある。

12. 拝一神教とその純化

(1) 一神教と多神教

1. 古代イスラエルの宗教は、他民族・他部族がそれぞれの神々を信じていることを前提にして、自らの神 (ヤハウェ) への信仰を語っていた。
2. 拝一神教：多神教的宗教文化を背景に、そのうちの特定の神への信仰を告白する宗教。
唯一神教 (monotheism) / 拝一神教 (monolatry) / 多神教
・「一神教と多神教」は 17 世紀に一般的な英語になった。(Oxford English Dictionary)
Henry More (1614-1687) による使用が初出。
An Explanation of the Grand Mystery of Godliness; or a True and Faithful Representation of the Everlasting Gospel of our Lord and Saviour Jesus Christ, 1660.
- ・宗教という上位概念 (類) に属する諸類型。
この言語使用の背後にある問題意識：近代ヨーロッパ諸国の世界進出による世界各地の宗教の知識の蓄積 → 世界諸宗教の中のキリスト教という歴史理解
「一神教と多神教」とは近代ヨーロッパ的な宗教理解である。まさにヨーロッパ的。
3. 多神教も拝一神教的であり得る。あるいは、その方が自然か？
多神教の最高神は、しばしば一神教的な帰依を要求する (ジャン・ボテロ『最古の宗教——古代メソポタミア』。包括的一神教、プラトン)。
日本の神道の場合、神社と氏子との関係。ヒンドゥー教。
4. 宇宙・世界観 (理論的観念的な包括性) と信仰 (個別的で具体的・限定的)
→ 哲学的一神教、古代ギリシャ哲学 (エレア派、新プラトニズム)
5. 山我哲雄『一神教の起源』
「古代イスラエル人やユダヤ人の間に「一神教」という概念があったわけではない。「一神教」や「多神教」は、近代以降の宗教学における宗教類型論上の概念であり、いわばその術語である。」(22)
「一神教の諸相」「下位類型」
「拝一神教 (monolatry)」
「単一神教 (henotheism)」: 「一神教というよりもむしろ多神教の一現象形態」「これと「拝一神教」が混同・混用されることも少なくない。」(31)
「包括的一神教 (inclusive monotheism)」

- 「排他的ー神教 (exclusive monotheism)」:「狭義のー神教」「唯一神教」とも訳す」(32)
「哲学的唯一神教 (philosophical monotheism)」
「俗説その一——ー神教は砂漠の産物か？」
「俗説その二——古代イスラエルのー神教はエジプトの宗教改革の影響を受けた？」
「天才フロイトの珍説」
「俗説その三——旧約聖書が語る歴史は史実なのか？」
「申命記の神観は、前八世紀の文書預言者たちの多くの場合と同様、拝一神教的であったと見るべきである。」(267)
「申命記史書の神観は基本的に拝一神教的なものであったと考えられる。これに対し、申命記史書のいくつかの箇所に散発的に、それを越えた、他の神々の存在自体を否定する唯一神教的な観念が見られることも事実である。」(336)、「それらは組織的な「編集」ではなく、個別的な「加筆」であり、その「疎らさ」から見て、申命記史書全体の性格を神観の上で大きく変える影響力を持ってはいないのである。」(338)
「旧約聖書において、ヤハウエのみを唯一の神とし、他の神々の存在を原理的に否定する唯一神教的な神観が最も集中的に見られるのは、イザヤ書四三-四六章である。」(340)
「第二イザヤで目立つのは、偶像礼拝に対する厳しく執拗な批判である。」(350)
「アメリカの旧約聖書学者マーク・S・スミスの、「捕囚の脅威という未曾有得の状況の中で、唯一神観は、新しい宗教の段階というよりも、レトリックの新しい段階をなしているのである」という言葉には同意できよう。」(355)
「第二イザヤ」「旧約聖書の信仰には、拝一神教的な民族宗教の枠を超えて、普遍的な世界宗教へと発展する可能性が開けたのである。」(355)
「一連の「革命」による唯一神教の成立」(361)
「キリスト教は、ユダヤ教から唯一神の観念を受け継いだ。」(368)
「キリスト教にとって、キリストの神性を容認しながら、いかにして神の唯一性を維持するかが神学的課題となった。」(369)

(2) 古代イスラエル宗教とー神教

6. 元来の古代イスラエル宗教は拝一神教的である。

古代イスラエルの宗教は、他民族・他部族がそれぞれの神々を信じていることを前提にして、自らの神(ヤハウエ)への信仰を語っていた。

「今、わたしは知った／彼らがイスラエルに向かって／高慢にふるまったときにも／主はすべての神々にまさって偉大であったことを。」(出エジプト 18.11)、「あなたは彼らおよび彼らの神々と契約を結んではならない。」(出エジプト 23.32)、「神は神聖な会議の中に立ち／神々の間で裁きを行われる。」(詩 82.1)、「かつて、お前は心に思った。「わたしは天に上り／王座を神の星よりも高く据え／神々の集う北の果ての山に座し」(イザヤ 14.13)

7. 出エジプト記：モーセの十戒(モーセ的ー神教)

20:1 神はこれらすべての言葉を告げられた。

2 「わたしは主、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神である。3 あなたには、わたしをおいてほかに神があってはならない。

4 あなたはいかなる像も造ってはならない。上は天にあり、下は地にあり、また地の下の水の中にある、いかなるものの形も造ってはならない。5 あなたはそれらに向かってひれ伏したり、それらに仕えたりしてはならない。わたしは主、あなたの神。わたしは熱情の神である。わたしを否む者には、父祖の罪を子孫に三代、四代までも問うが、6 わたしを愛し、わたしの戒めを守る者には、幾千代にも及ぶ慈しみを与える。

7 あなたの神、主の名をみだりに唱えてはならない。みだりにその名を唱える者を主は罰せずにはおかれぬ。

8 安息日を心に留め、これを聖別せよ。

- 9 六日の間働いて、何であれあなたの仕事をし、
- 10 七日目は、あなたの神、主の安息日であるから、いかなる仕事もしてはならない。あなたも、息子も、娘も、男女の奴隷も、家畜も、あなたの町の門の中に寄留する人々も同様である。
- 11 六日の間に主は天と地と海とそこにあるすべてのものを造り、七日目に休まれたから、主は安息日を祝福して聖別されたのである。
- 12 あなたの父母を敬え。そうすればあなたは、あなたの神、主が与えられる土地に長く生きることができる。
- 13 殺してはならない。
- 14 姦淫してはならない。
- 15 盗んではならない。
- 16 隣人に関して偽証してはならない。
- 17 隣人の家を欲してはならない。隣人の妻、男女の奴隷、牛、ろばなど隣人のものを一切欲してはならない。」
- ↓
- 理論的な神の一性ではなく、人間との相関性（「わたしーあなた」）における一性の主張である。

（3）ユダヤ教と唯一神教

古代イスラエルの歴史において、王国の分裂からバビロン捕囚（AD.597/587/583）へ至る過程は、民族滅亡のプロセスであった。古代イスラエル宗教は、この歴史的現実に対して、それを神に対する民族の背き・反逆と、民族に対する神の罰として解釈し、その上で、民族の再生（神に帰ることによって民族を再建する）を展望しようとした。

これは、古代イスラエルの宗教の純化という仕方で行われ、ここに、ユダヤ教は成立する。ユダヤ教的な唯一神教。民族の危機は、しばしば民族的伝統の純化を求める。

8. バビロン捕囚から帰還した者たちを中心に宗教と民族の再建を試みる。
ネヘミヤ・エズラの改革、宗教改革

9. ヤハウエの唯一性の主張：イザヤ書における「神の唯一的な普遍性」

43:10 わたしの証人はあなたたち／わたしが選んだわたしの僕だ、と主は言われる。あなたたちはわたしを知り、信じ／理解するであろう／わたしこそ主、わたしの前に神は造られず／わたしの後にも存在しないことを。11 わたし、わたしが主である。わたしのほかに救い主はない。12 わたしはあらかじめ告げ、そして救いを与え／あなたたちに、ほかに神はないことを知らせた。あなたたちがわたしの証人である、と／主は言われる。わたしは神 13 今より後も、わたしこそ主。わたしの手から救い出せる者はない。わたしが事を起こせば、誰が元に戻しえようか。

（4）一神教は排他的か？

列王記下

「5:1 アラムの王の軍司令官ナアマンは、主君に重んじられ、気に入られていた。主がかつて彼を用いてアラムに勝利を与えられたからである。この人は勇士であったが、重い皮膚病を患っていた。2 アラム人がかつて部隊を編成して出動したとき、彼らはイスラエルの地から一人の少女を捕虜として連れて来て、ナアマンの妻の召し使いにしていた。

5:3 少女は女主人に言った。「御主人様がサマリアの預言者のところにおいでになれば、その重い皮膚病をいやしてもらえるでしょうに。」

・・・

14 ナアマンは神の人の言葉どおりに下って行って、ヨルダンに七度身を浸した。彼の体は元に戻り、小さい子供の体ようになり、清くなった。15 彼は随員全員を連れて神の

人のところに引き返し、その前に来て立った。「イスラエルのほか、この世界のどこにも神はおられないことが分かりました。今この僕からの贈り物をお受け取りください。」

・・・

17 ナアマンは言った。「それなら、らば二頭に負わせることができるほどの土をこの僕にください。僕は今後、主以外の他の神々に焼き尽くす献げ物やその他のいけにえをささげることにはしません。18 ただし、この事については主が僕を赦してくださいますように。わたしの主君がリモンの神殿に行ってひれ伏すとき、わたしは介添えをさせられます。そのとき、わたしもリモンの神殿でひれ伏さねばなりません。わたしがリモンの神殿でひれ伏すとき、主がその事についてこの僕を赦してくださいますように。」

19 エリシャは彼に、「安心して行きなさい」と言った。」

10. 拝一神教としての古代イスラエル宗教は、必ずしも極端に排他的なわけではない。これは、後の一神教にも妥当する。

排他性が際立つのは一定の条件下である。たとえば、戦争などの政治的民族的な対立状況。聖書の一神教(唯一あるいは拝一に限らず)と偶像禁止とは、緊密に結びついている。

11. 「神を神とするという要請」と「神を造り出そうとする人間」

・欲望の正当化あるいは具体化としての偶像

人間は欲望を投影して神を生み出し、その神に支配される(王権の論理)。

・本来、偶像禁止とは、人間の自己解放を意味していた。→ 偶像破壊の歴史、その情熱。

12. 宗教にとって「像」とは何か。

像はいつ偶像になるのか。相対的なものの絶対化。あらゆるものは偶像となり得る。

13. キリスト教の唯一教的神観は、古代哲学の一神教(ギリシャのエレア派、新プラトン主義、インドのウパニシャド哲学など。「一者」が唯一の真実在と見なされ、他のものはすべてその現れとする)との結合において理論的に強化された。

<文献>

1. 日本聖書協会『聖書 新共同訳』
2. 荒井章三・森田雄三郎『ユダヤ思想』大阪書籍。
3. 荒井章三『ユダヤ教の誕生』講談社選書メチエ。
4. 山我哲雄『聖書時代史旧約編』岩波現代文庫。
『一神教の起源——旧約聖書の「神」はどこから来たのか』筑摩書房。
5. 石田友雄『ユダヤ教史』山川出版社。
6. 市川裕『ユダヤ教の歴史』山川出版社。
7. 小原克博『一神教とは何か——キリスト教、ユダヤ教、イスラームを知るために』平凡社新書。
8. ジャン・ボテロ『最古の宗教——古代メソポタミア』法政大学出版会。
9. H.Richard Niebuhr, *Radical Monotheism and Western Culture with Supplementary Essays*, Harper Torchbook, 1943.